

## 風の谷より

松田 妙子

この前雨が降ったのは十年も前だったように感じられるくらい、神戸では日照りと炎暑が続いています。梅雨の最中でさえ、「砂漠民のように雨を渴望する」私にとってはまさに地獄。しかも過活動は亢進し、炎天下に怒涛の如く汗を流して運動することから逃れられません。「眠れない・食べれない・過活動」と3拍子揃って消耗するばかり。「ランナーズ・ハイ」という言葉を連想します。極限状況で走り続けることに1種の快感すら覚えて、止まることができなものです。自分が生き急いでいるようで、怖いのです。「私に來たいのち」は、こういう生き方をするか？誰もが異常だと思うこの酷暑に、私がこういう状態に陥ったということは、私に何かを気づけよ、ということなのか？

と思っても、疲れ果てた私には、何を気づけばいいのかもわかりません。大地と同じく私の心も渴き果てて、うるおうことを忘れてしまったかのよう。

収穫といえば、20数年ぶりに「風の谷のナウシカ」のコミックスを読む気になったことくらいでしょうか。買ったまま長年放置してきた理由の1つは、純粹に技術的な問題。著者の宮崎駿氏が、あまりにも優れたアニメーターであるが故に、これは漫画家の描いた漫画ではありません。紙の上に展開する表現としてはひどく見づらいのです。これは相撲取りに空手をやらせるようなものであって、「土俵が違う」のだから、仕方のないことです。

今1つの理由は、「腐海」だの、「蟲(むし)」だのがうごめく世界が、気味悪かったから。今も気味悪いけれど、凄じりアリテイをかんじます。明らかに地球に何かが起こっている

と思わせる、この地球全体を包む「異常気象」や、元気なのは虫だけだというこの夏の状況下で読むと。

この物語では、人類文明は絶頂期に達した後、破滅的な戦争によって、一気に衰退し、地球は人類の生存には到底適さない環境になっていきます。異様に進化した昆虫と、毒をまき散らす不気味な植物のはびこる世界の片隅で、人類はそれこそ地表にはりついた苔のように、細々と生を営んでいます。にも拘らず人間たちは戦争を繰り返し、いのちを殺（あや）め続けているのです。26年前に発表された作品とはとても思えないほど、生々しい現実感を伴って迫ってくる物語です。

少女ナウシカは、虫と心を通わせます。少女と虫という取り合わせが意外でした。今も昔も、少女には花や小鳥や小動物が似合う、というイメージが定着していますから。そういえば、以前の小学生の夏休みの自由研究は、女子は植物採集、男子は昆虫採集と相場が決まっていたとか。何故でしょう？生物としての男女の相違なのか、文化や教育のせいなのか。

前者だとは思いたくないけど、私も虫は大嫌いです。物心ついた時から、無条件に虫の形が怖いのです。蜘蛛や蛇を怖がる人は多いですね。毒のない蜘蛛や蛇よりは、熊の方が襲われると危険なのに、熊はぬいぐるみなどで愛されるといっても、考えてみると不思議です。花が咲いても実を結ぶ種子植物より、葦や苔などの胞子植物の方を不気味と感じる人が多いのも不思議。人類が共通した、太古の記憶のようなものがあるのでしょうか？人間が不気味だと思おうが可愛いと思おうが、虫もクラゲもバクテリアも、みんなそれぞれの生を生きています。「風の谷のナウシカ」は、そういうしたこと問いかけでもあるような気がします。

「風の谷のナウシカ」はアニメ版もありますが、アニメーションの制作・上映には、電気を始め、膨大な資源エネルギーが必要

です。優れたアニメーターである宮崎駿氏が、其れに気づかないはずはありません。「自分のまた環境を破壊している元凶の1人」であることを自覚しつつ、「風の谷のナウシカ」や「もののけ姫」などの数々のアニメを作って、人と自然との関係を、氏は問い続けていたのでしよう。

宮崎アニメを上映するのに使う電気は良くて、ラブホテルをライトアップする電気は悪いなどは、誰にも決められません。蝶々やカブト虫がいかにも人間に愛され、ゴキブリやゲジゲジがいかにも嫌われようとも、彼らの命に貴賤はないのと同じように。それでも私たちは選んだり、嫌ったり、見捨てたりします。現に私もさつき、1匹のゴキブリを殺しました。殺して「やれやれ、良かった」と思っています。知らずにカタツムリを踏み潰した時には、自分の不注意で生き物を殺（あや）めてしまったことを、あれほど悔んだ私なのに。

「選ばず・嫌わず・見捨てず」が阿弥陀仏のありようなら、自分はいかにそこから遠い所にいることか。天に見捨てられたのかと思うくらい厳しいこの夏に、そんなことを思っています。

2010、9、8、9：15PM\*

